

日本文学全史



日本文学全史 現代

責任編集

市古 貞次

編集

秋山 虔

大久保 正

久保田 淳

堤 精二

三好 行雄（本巻担当）

學 燈 社

日本文学全史 6 現代

昭和53年11月1 日初版発行

定価 7,000円

編者代表 市 古 貞 次

発行者 石 井 時 司

印刷所 大盛印刷株式会社

製本所 有限 岩 佐 製 本 所
会社

発行所

株式会社 學 燈 社

160 東京都新宿区西早稲田 3-5-10

振替東京 4-36253

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます。
書店または本社に直接申し出ください。

3391-1044-1021

は し が き

一千数百年に及ぶ日本文学の流動・展開のあとを、明快・的確に捉えるには、どうしたらよいか。日本文学の歴史を跡づける方法については、すでに何回となく論議され、また種々の具体的な方途も提唱されている。これには研究者の文学研究の態度・方法が深くかわっており、文学史の構築は研究の最後の到達点ともいうことができようが、日本文学史の記述にあたって、まず問題にされたのは、組織・編成であり、その史的区分であった。

和歌の流れ、文章の変遷などを説いた書はすでに中世・近世に書かれていたが、日本文学の歴史が著されるに至ったのは、近代に入ってからである。明治二十三年十月刊行の三上参次・高津敏三郎の『日本文学史』は「本書は実に本邦の文学史の嚆矢なり」と自ら記すように、西欧の文学史に啓発されて初めて書かれた日本文学史であり、以後の文学史研究の出発点となった書であるが、はじめに文学の起源を述べ、以下奈良朝・平安朝・鎌倉時代・南北朝及び室町時代・江戸時代という時代区分のもとに叙述している。主として本書によったアストンの『日本文学史』（一八九九）もこれに倣っているが、江戸時代の次に東京時代を設け現代を扱っているのが新しい。後年坂井衡平が名著『新撰国文学通史』（大正一五）で、大和時代・飛鳥奈良時代・平安時代・鎌倉時代・吉野京都時代・江戸時代・東京時代としているのは、アストンのそれと関係があるらしい。

また三上・高津の『日本文学史』に先立って二十三年四月に出た芳賀矢一・立花銑三郎の『国文学読本』は『国文世々の跡』などの影響をも受けた文例集・歴代選であるが、巻頭に長文の緒論があり、文学の定義・特性

等を述べ、国文学の沿革を記しているのが新鮮であった。これは簡単な文学史ともみられるが、そこでは上古・中古（（四一—二八））・鎌倉時代・室町時代・江戸時代・維新後と六分し、上古・中古という称を用いたのが注目される。芳賀矢一は九年後の明治三十二年『国文学史十講』を著し、これがのちに出た藤岡作太郎の『国文学史講話』とともに明治期を代表する文学史として長く重んじられたが、上古・中古・近古・近世・現代の五に分ち（近古を中世ということが今日では多いのを除いては）、ほぼ今日まで通用している時代区分を確立したということができる。

こうして日本文学史では、平安・鎌倉……等の政治の中心地によるものと、上代（上古）・中古・中世……等の時間によるもの（これは古え・中ごろ・今という古来の考えに基くと同時に、西欧の文学史の影響もあらう）とが併用されて今日に至っている。そういうなかにあつて、大正年代に尾上八郎が『日本文学新史』（大正三）で時代思潮の変遷を重視し、情中心時代（上古・奈良朝・平安朝）・法中心時代（鎌倉・室町）・道中心時代（江戸）・主義中心時代（明治）というように分け、津田左右吉が『（文学に現はれたる）我が国民思想の研究』（大正五—一〇）で、貴族文学の時代、武士文学の時代、平民文学の時代と名づけ、土居光知の「日本文学の展開」（『文学序説』大正一一）が叙事文学の時代、抒情文学の時代、物語文学の時代、主情主義否定の時代というように文学形態によるなど、新しい区分が行われている。これらの大正期の試みは、政治史的な区分にあきたらず、かつ古代・中世などの時間的区分が必ずしも固定しがたい点などを考えて、思潮・性格・形態などによって文学の流れを展望しようとしたのであらうが、それぞれの名称その他については異論が少なくなく、多くの人々の採るところとならなかった。

いったい歴史を記述する方法として、編年体・紀伝体・紀事本末体の三が存することは、中国の史書について

つとに言われているところである。文学史が文学の展開を捉えるものであることはもちろんであるが、同時に作品を創作した人間と、作品乃至人間（作者・読者）に密着する時間的、空間的環境を無視することはできない。それゆえこれまでに書かれた文学史は大きく史的区分を行い、編年体の時の推移を第一としながらこれに文学形態の展開を考慮に加え、作家の伝記等をも織りまぜている。つまり編年体を重んじながらこれに紀伝・紀事本末体を適宜織りまぜて成っているといってもよいかもしれない。

以上のように文学史の編成については、種々試みられており、なお模索の域を出ない面もあるが、本書では、一般に用いられている時間による史的区分をとり、上代・中古・中世・近世・近代・現代の六区分とした。上代は大和時代、中古は平安時代、中世は鎌倉・南北朝・室町時代、近世は江戸時代に相当し、近代は明治・大正期、現代は昭和期をほぼさしている。そして各時代のなかにそれぞれ十章乃至十三章を設けて、各形態の展開を十分考えながら、文学の総合的な流れを描き出すように努めたつもりである。なお各時代の初め終わりについても研究者によって必ずしも一致していないが、本書では最も一般的であり妥当だと思われる説に従うようにした（各巻序章参照）。

以上のような構想のもとに、在来の研究成果を踏まえ、最も新しくかつ正確な文学史を提供することをめざして、学界の第一線に立つ方々を煩してそれぞれの専門領域について御執筆願ったものがこの『日本文学全史』である。本書は創業三〇周年の記念出版として、學燈社から依頼を受け、大久保正・秋山虔・久保田淳・堤精二・三好行雄および市古貞次の六名が討議を重ね企画編成したものであるが、一般にこのような多数の分担執筆はやもすると全体としての統一を欠く虞れがある。そういう難を十分考慮し、各巻については、編者がそれぞれ専門とする時代を担当して、執筆者の御協力のもとに、統一をはかり有機的な連絡・調整を行うよう極力努めたつ

は し が き

もりである。編集の不手際などからなお不十分なところも少なくないであろうが、将来の文学史研究への一つの礎石となればまことに幸いである。終わりにわれわれの企画に賛同して御協力下さった執筆者各位に心から御礼申し上げる次第である。また出版に当たって労を惜しまず尽力された學燈社に対しても謝意を表したいと思う。

昭和五十三年三月十五日

編者代表 市 古 貞 次

目次

第一章 転形期の文学

1	プロレタリア文学運動の始発	16
	『文芸戦線』の発刊 16 / 再刊から昂揚へー青野季吉の理論 17 / 葉山・林・平林ら新進作家の活躍 19 / 新人作家の文体 20 / プロレタリア文芸聯盟の結成 22 / プロ芸の結成 24 / 三派鼎立の時代 26	
2	前衛芸術との遭遇	27
	関東大震災と前衛芸術の史の様相 27 / 新感覚派の成立とその運命 29 / 未来派の伝播 32 / 表現派の波動 34	
3	市民文学の動揺	36
	『宣言一つ』とその周辺 36 / 『宣言一つ』の正と負 39 / 有島と芥川 40 / 内容的価値論争と散文芸術論争 41 / 私小説論と市民文学 43 / 芥川と大正文学の命運 44	
4	現代詩の胎動	46
	大正十四年の詩史的問題状況 46 / 構成派の衝撃 49 / シュルレアリスムの洗礼 50 / 『詩と詩論』の成立 52 / 新即物主義の導入 54	

第二章 現代文学の試行

1 プロレタリア文学運動の展開……………58

総聯合の結成とナップの生誕 58 / 「プロレタリア・レアリズム」の提起
 60 / 「芸術大衆化論争」の開始 62 / 論争の争点と意味 64 / 「芸術的価値論争」の出発点 65 / マルクス主義者のさまざまな対応 66
 「社会」の発見 69 / 作品におけるリアリズム 70 / 「個人」と「集団」
 72 / 文学大衆化の試み 74 / 運動の「ボルシェヴィキ化」へ 75
 『文戦』派の動向 78 / コップの成立 80 / 弾圧とナルプの解体 82

2 モダニズム文学の展開……………85

『文芸時代』廃刊前後 85 / 形式主義文学論争 86 / 横光の『上海』 88
 近代科学への信頼 89 / モダニズムの作家たち―龍胆寺雄と中村正常
 91 / 井伏鱒二・阿部知二・舟橋聖一 93 / 嘉村礒多・梶井基次郎 94
 稲垣足穂・芹沢光治良・林芙美子 95 / 十三人倶楽部 97 / 新興芸術
 派倶楽部と共同制作『1930年』 98 / 新心理主義文学 100 / 新社会派
 文学の登場 101 / ファシズム登場、モダニズム崩壊 103

第三章 旧世代作家の動向

1 旧世代作家の沈滞……………106

『わが心を語る』 106 / 「円本」の時代 108 / 沈滞の諸相 109 / 潤一
 郎・春夫・藤村 111

2	旧世代作家の変貌……………	112
	牧野信一と室生犀星 112 / 近代知識階級の命運 113	
3	昭和文学への参加……………	116
	創作活動の再開 116 / 私小説の復活 118	
第四章 △昭和文学▽の成立		
1	転向の時代と転向文学……………	122
	転向の時代 122 / 片岡鉄兵の転向宣言 124 / 島木健作の軌跡 125	
	転向文学をめぐる論議 128 / 中野重治のたたかいと転向文学のゆくえ 129	
2	△文芸復興▽前後……………	132
	『文学界』の創刊 132 / 転向と△文芸復興▽ 133 / △文芸復興▽の内 実 134 / 行動主義と不安の文学 136 / 横光利一と川端康成 133 / 堀 辰雄ほか 140 / 芥川賞と石川達三 141 / 高見順と太宰治 143 / 石川 淳と伊藤整その他 145 / 私小説と市井事もの 147 / その他の新人 148 時代の流れ 150	
3	批評における△現代▽……………	152
	△現代▽的自覚の誕生 152 / マルクス主義文学における△現代▽の場合 155 / △社会▽を含む「私」表現の問題 159 / 批評における「心理学」 161 / 古典論への転換 162	
4	民族主義と文学……………	165

第五章 詩歌の△現代▽

横光利一の『上海』165 / 『共同被告同志に告ぐる書』以後 166 / 『純粹小説論』における「民族」168 / 日本浪漫派の動向 169 / 保田与重郎の立場 171 / 「近代の超克」、戦後の問題 173

1 現代詩の動向

I プロレタリア詩の動向

ナップの結成とプロレタリア詩 178 / ナップの転換からナルブ時代へ 179 / プロレタリア詩の崩壊 181

II アナーキズムの周辺

アナーキズム詩と詩的アナーキズム 182

III 『詩と詩論』以後

『詩・現実』の史的位置 183 / 西脇順三郎と村野四郎 184 / 『文芸汎論』『詩法』など 186

IV 昭和十年代

『四季』の詩人たち 187 / 三好達治と丸山薫 188 / 立原道造と津村信夫・田中冬二 188 / 『四季』の位置 189 / 『ユギト』『日本浪漫派』の詩人たち 189 / 『歷程』の詩人たち 191 / 草野心平と逸見猶吉 191
高橋新吉と中原中也 192 / 山之口鎖と菱山修三 192 / 『歷程』の位置 193

V 日中戦争下の動向

日中戦争と詩 194 / 戦時下のモダニズム 195

2 昭和短歌の動向

I	革新運動の前提	197
	『アララギ』批判 197 / 口語歌への試行 198	
II	新興歌人聯盟の成立	199
	五島茂の提言 199 / 革新ののろし 200	
III	プロレタリア短歌運動	201
	激越な離合集散 201	
IV	モダニズム短歌	203
	拡散した動向 203	
V	伝統短歌への波紋	205
	破調と散文化 205 / 滅亡論議の登場 206	
VI	日本的なものの再吟味	207
	『多磨』の創刊 207 / 歌論の衰弱 208	
VII	日中戦争下の抵抗歌	209
	前線兵士の歌 209 / 善麿の『六月』 211 / 『新風十人』の結末 212	
3	昭和の俳句	213
I	花鳥諷詠論と写生俳句	213
	花鳥諷詠論の成立まで 213 / 花鳥諷詠論の内容 214 / 花鳥諷詠論の人々 215	
II	新興俳句運動とその性格	217
	客観写生批判―抒情への着眼 217 / 連作俳句 219 / 都会素材・モンタージュの導入 221 / 感情・個性回復の理論 222	
III	無季新興俳句とその性格	224
	無季容認の背景とその展開 224 / リアリズム俳句 226	

IV 戦時俳句の性格	226
無季戦争俳句	226
／人間探求の志向	228
	226

第六章 戯曲と演劇

1 プロレタリア演劇の展開	232
---------------	-----

築地小劇場の分裂	232
／政治と演劇との関連	233
／プロレタリア演劇	
運動の昂揚	236
／運動の多様化と組織の再編	238

2 一九三〇年代の動向	241
-------------	-----

進歩的演劇運動への転換	241
／創造方法の追究	243
／歴史劇の意図	
245	／現実への架橋
247	

3 戦中演劇の潮流	250
-----------	-----

新協・新築地の解散	250
／移動演劇の苦悩	252

第七章 戦中・戦後の文学

1 戦争と文学	256
---------	-----

文化統制の強化	256
／戦争文学の流行	257
／ペン部隊の従軍	259
／国策文学の氾濫	259
／統制の強化と文壇新体制	261
／太平洋戦争勃発	262
日本主義イデオログ	265

2 文学的抵抗の系譜	266
------------	-----

文学的抵抗について	266
／私小説とそのパロディ	267
／風俗小説と歴史小説	269
／中島敦その他	270
／大正文学研究会など	271

3 戦争と詩	272
--------	-----

開戦の反応と詩壇の組織化	272
「国民詩人」高村光太郎・三好達治	274
草野心平と金子光晴	276
戦争末期の詩壇	276
4 文学における戦後	277

敗戦期日本の社会的位相	277
ジャナーリズムの復活と大家の登場	279
新戯作派の活躍	281
その他の既成作家たち	283
民主主義文学運動	284
『近代文学』の運動と政治と文学論争	286
批評家たちの活動	288
戦後派の登場―野間宏・椎名麟三・埴谷雄高	290
梅崎春生・大岡昇平・武田泰淳	292
中村真一郎・三島由紀夫	294
朝鮮戦争と民主主義文学陣営の混乱	295
安部公房・堀田善衛・島尾敏雄ほか	297
戦後文学の終点およびその基本性格	299

第八章 戦後の詩歌と演劇

1 戦後詩の諸相	302
----------	-----

I 戦後詩の胎動と出発	302
-------------	-----

焦土の歌声	302
詩人の戦争責任	303
金子光晴と西脇順三郎	304
リズムと批評の問題	306
マチネ・ポエティクの定型詩運動	307
II 戦後詩の成立と展開	309

モダニズムの変容と『荒地』	309
詩の意味性の追究	311
左翼詩人の変貌と『列島』	313
ネオロマンティズムとネオリアリズム	315
純戦後派の登場	317
疑問符の世界とシュルレアリスム	318
新しい思想詩と政治詩	322

III 現代詩壇の動向と課題	323
安保闘争と新世代の擡頭	323
年代の動向	327
詩ブームと女流詩人の活躍	325
七〇	320
2 戦後の短詩型文学	329
I 昭和二十年代	329
敗戦直後	329
協会の結成と『天狼』創刊	331
昭和二十年代の成果	339
現代俳句	335
II 昭和三十年代以後	342
前衛短歌	342
年代以降	349
前衛俳句	346
昭和三十年代の成果	347
昭和四十	342
3 演劇と戯曲の戦後	351
終戦の時点	351
て 357	353
展開 369	355
／ 戦曲に現れた戦後	362
／ 戦後派の動き	366
／ 混沌のなかで	372
／ 体制を整える	355
／ 劇場を求め	355
／ 小劇場運動の	366
1 昭和初年代の展開	376
大衆文学と円本	376
作家たちの模索	379
大衆文学の黄金時代	377
一人三役の活躍	379
2 戦時下の曲折	380
『宮本武蔵』の誕生	380
／ 直木賞の創設	381
／ 時局への対応	383

3 解放と混沌の時代	384
肉体の門ひらく	384
386 / 『三等重役』の出現	387
ラジオ小説の流行	387
4 視聴覚化の時代	388
剣豪リバイバル	388
391 / 推理小説の波	389
代説話』の作家たち	391
392 / 女性作家の活躍	392
歴史ものの活況	390
『近代説話』の作家たち	391
5 多様化の状況	392
引揚派の擡頭	392
393 / 新戯作派の活躍	393
SFの開花	394
情報小説の氾濫	395
第十章 児童文学の△現代▽	
1 プロレタリア児童文学の展開	398
プロレタリア児童文学と△現代▽	398
権力の弾圧と未明伝統の呪縛	400
2 生活童話の成立	402
△生活童話▽の概念	402
403 / 児童文学の冬の季節	403
404 / 新美南吉と『日本少国民文庫』	406
3 戦中児童文学の動向	407
児童文学の復興現象	407
409 / 児童文学の本質	409
4 戦後の児童文学	410
センカ紙文化と児童文学	410
412 / 伝統批判の動き	412
413 / 戦後児童文学の	413

時代区分 413 / 技術主義の問題 415

第十一章 同時代文学の動向

1 戦後文学の変質と拡散 418

五〇年代後半の文学 418 / 関係性の文学 420 / 女流の眼 424 / 行動
のテーマ 426 / 批評の転換 428

2 〆戦後〱の終焉 430

戦後文学は幻影だったか 430 / 六〇年代文学の核、井上光晴 432 / 大
学闘争―〆戦後〱の葬送 434 / 三島由紀夫の自決 436 / 文学の多様化
傾向 438

3 一九七〇年代文学の諸相 440

新しい戯作派―文学の大衆化傾向 440 / 自己確認の文学 443 / 母性神
話の崩壊 445 / 戦後生まれの作家群―八〇年代文学へ 447

終章

明治・大正作家の晩年 449 / 伝統としての〆近代〱 451 / 故郷として
の〆西洋〱 452

参考文献 455

索引 480